

テニスにおける日本女子エリートジュニアの育成に関する研究

A study on the development of the Japanese women youth elite tennis players

1K07B070-6
指導教員 主査 原田宗彦先生

金城理美
副査 間野義之先生

【緒言】

世界最高峰のグランドスラムでは、大会毎に違った選手が優勝するケースが多く見られる。その背景として、各国の育成システムが選手間の競争激化要因であると考えられている。蒲生（2004）は「世界の強豪国は、広く国民の中から『国家システム：独自の方法』優秀な若年層を発掘し、『統一した指導育成の理念』を持って、育成強化してきた結果、国際競技力が向上し、オリンピックでのメダル獲得数が著しく伸びてきた」と述べている。その中、現在シニア女子世界ランキング 100 位内において日本人選手は 2 選手のみとなっている。だがジュニア世界で、日本人女子が 41 年ぶりに全英オープンジュニアで決勝進出を果たすなど、若手が台頭してきている。また国内では、2008 年にナショナルトレーニングセンターが創設された。強化拠点を確保し、現在は様々な強化施策が行われている。日本テニス協会は、地域レベルの活動を活性化させる為、「一貫指導体制推進委員会」を発足し、全国 9 地域に伝達合宿を行っている。シニアで活躍する為には、低年齢期からの一貫した指導が重要と考えられる。

【目的】

本研究では、女子ジュニア選手の環境分析を行う。明らかにされた日本テニス界の強化体制の問題点を検証する。今後エリートジュニア選手にとってどのような育成環境を展開して行く事が望ましいか考察する事を目的とする。

【方法】

本研究では、日本テニス界強化指導者 6 名と 14 歳～18 歳の全国大会出場経験選手 5 名を対象に、1 対 1 形式の半構造化インタビュー方式の質的調査を実施した。質問内容は、日本テニス界の取り組み・諸外国の現状を踏まえ、指導者側に「現状」「NTC」「課題」「今後の展望」を 4 つのカテゴリーに分類、選手側には「現状」「課題」「将来」「今後の展望」の 4 つを分類し、質問結果を IC レコーダーで録音し、データ分析を行った。

【結果】

—指導者側分析結果—

（現状）精神的な自立が遅れている。国内の大会環境は夏期に集中傾向であり、高体連とテニス協会が連携し日程改革を再考する余地がある。「一貫指導システム」「指導者養成」は全国的に浸透しきれていない。

（NTC）ハイレベルのトータルサポートが実現可能な NTC が創設された事は、日本テニス界にとって非常に大きな意味を持っている。今後の展開として、NTC を中心に各都道府県にもトレーニングセンターを（エリatreセン）作り活性化させる必要がある。

（課題）強化費の捻出方法、海外選手との体格差など多くの課題が存在している。特にパワーを補う方法として、俊敏性・敏捷性・脚力が重要であり、これらは低年齢時から指導しなければならない。

（今後の展望）指導者は、強化対象を広げる為にもエリatreセンの活性化を図る事が必要と考えている。その為各都道府県との共通理解を増やし、連携を深める必要がある。

—選手側分析結果—

（現状）練習環境は全日制学校に在籍している部活生と通信制学校に在籍しクラブで練習しているジュニアとの間で大きな差がある現状である。大会日程については、夏期に集中傾向で体力的に厳しく感じている。

（課題）自信を持っていない日本人ジュニア選手が多い。試合で集中力が持続出来ず、ベストプレーを出す事が出来ない選手が見られる。また海外選手と比較し、パワーの差を感じているが、その為の解決策も考えている。

（将来）ジュニア時代はグランドスラム出場を目標とし、卒業後プロ活動を志望している選手が多い。

（今後の展望）選手達は、ナショナル選手以下にも強化対象を広げ、合宿や他の地域選手との交流を深めたいという希望を持っている。

【考察】

日本テニス界が力を注ぐ「一貫指導」「指導者養成」は準備体制が整ったものの、長期的な視野を持ち取り組まなければならないであろう。この取り組みに対しエリatreセンの活性化が必要である。NTC と各地域協会、高体連等の各テニス関係者の連携が、今後非常に重要となるであろう。また強化施策を実行するにあたり、強化費の増加が必要であり、財政面の改善が必要と言える。なお、エリートジュニア選手の場合は、高体連の海外遠征に関する規定が時として障害になる状況もある。選手にとって最良の環境を構築する為には、高体連の臨機応変な対応が必要となるであろう。NTC と各地域協会、高体連等の各テニス関係者の連携が、日本テニス界の今後にとって非常に重要になると考えられる。